

# 平成24年度 肥料農薬委託試験成績

## I. 福島県農業総合センター(一般)

### 1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
1	水稲・麦栽培におけるP、K減肥基準策定のための連絡試験 (水稲単作におけるP、K減肥基準の策定)	浜地域研究所	JA全農(全国本部)	継(H21～25)	リン酸肥沃土の低いほ場では、4年連続でリン酸施肥量を低減させた場合及びリン酸カリ低減肥料を施用した場合、いずれも収量、品質への影響は確認されなかった。
2	水稲疎植栽培法の安定化に向けた効率的施肥技術の検討	浜地域研究所	ジェイカムアグリ(株)	新(H23～24)	浜通りにおける疎植栽培法は、従来の栽植密度に比べ茎数が少なく、やや低収となった。LP100区に比べ、LP80区で慣行区と同等の収量・品質となった。
3	水稲疎植栽培法の安定化に向けた効率的施肥技術の検討	会津地域研究所	ジェイカムアグリ(株)	新(H23～24)	水稲疎植栽培ではGIB(0.2kg/a)～LPS80(0.4kg/a)のN成分配合にすると生育期間中の茎数はやや少ないが、基肥-穂肥施肥体系と同等の収量、品質が確保された。

### 2. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
4	加里追肥による果実肥大促進技術の確立(夏秋トマト)	作物園芸部	JA全農(全国本部)	新(H23～24)	カリ追肥によるカリの増施がトマトの総収量に対する影響は認められなかった。
5	さやいんげんの安定生産技術の確立(栽培管理技術による高温期減収抑制の検討)	作物園芸部	JA全農(全国本部)	新(H23～24)	夏期高温時のサイインゲン減収抑制のため葉面散布剤の効果について検討した。着莢率や花粉稔性への影響は認められず、収量も対照区と同等～やや低く減収抑制効果は認められなかった。
6	5-アミルプリン酸入り液肥を用いた効果確認試験	作物園芸部	JA全農(県本部)	継(H22～24)	冬春作トマトに対する5-アミルプリン酸(ペンタキープS)の葉面散布によって、育苗期、生育期とも生育、収量、果数、1果重への影響は認められなかった。

### 3. 果樹

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
7	ナシの効率的施肥技術確立試験	生産環境部	太平物産(株)	新(H23～25)	浸透水量による影響が大きく、施肥資材による差異は認められなかった。また、施肥資材による果実中の糖組成にも影響は認められなかった。
8	リンゴの枝幹害虫(ヒメボクトウ)に対する防除効果確認試験	果樹研究所	JA全農(全国本部)	継(H23～24)	ヒメボクトウ成虫発生初期のフェニックスフロアブル4,000倍の散布はふ化幼虫の食入阻害効果が高く、2週間間隔で散布すると効果が高まった。
9	モモ・ナシの共通防除体系におけるナシ病害虫に対する防除効果試験	果樹研究所	JA全農(全国本部)	新(H24～25)	モモ・ナシドリフト低減体系はナシ黒星病及びナシ輪紋病に対してナシ慣行防除体系と同等の防除効果が得られた。
10	リンゴのヒメボクトウに対する新殺虫剤の食入阻害効果の検討	果樹研究所	フェニックス普及会	新(H24)	バイオセーフの樹幹注入処理はヒメボクトウ幼虫の密度低下に効果があり、春と秋の年2回継続して処理すると防除効果が高まった。また、蓄圧式噴霧器による同剤の樹幹注入処理は注射筒による処理と比較して防除効果が高いと考えられた。
11	モモにおけるコスカシバの防除効果試験	果樹研究所	フェニックス普及会	新(H24)	フェニックスフロアブル200倍、500倍及びバイオセーフ2,500万頭/25Lはコスカシバに対する防除効果が認められた。

## II. 福島県農業総合センター(放射性物質吸収抑制関連)

### 1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
12	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	新(H24～26)	土壌中の交換性カリウム含量と玄米のCs137濃度の相関は、土壌採取時期が7/6、7/25、8/17、収穫後で高い相関が認められた。
13	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	浜地域研究所 (相馬市玉野地区)	JA全農(全国本部)	新(H24～26)	ゼオライト施用およびカリ補正をおこなうことによって、一定の放射性Csの吸収抑制効果が認められた。
14	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	会津地域研究所 (河沼郡柳津町藤地区)	JA全農(全国本部)	新(H24～26)	ゼオライトの投入量100～20kg/aの範囲内においては、水稲の生育への影響は見られなかった。また、慣行区においても放射性Csが検出限界以下であったため、放射性Csの低減効果は確認できなかった。

### 2. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
15	放射性物質吸収抑制技術の開発-野菜 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	新(H24～26)	ゼオライト施用による放射性Csの吸収抑制効果は、1t/10aでは認められなかったが、プロックローほ場において2t/10aの施用量で効果が認められた。

## II. 県植物防疫協会委託 (果樹)

No.	試験課題名	試験希望場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
12	コンピューター設置果樹園におけるハダニ類とカブリダニの調査と天敵増加の解析	県植物防疫協会 (防除コンサル(株))	JA全農(県本部)	継(H22～25)	福島市内の果樹園にはミヤコカブリダニ、ケナガカブリダニ及びフソウカブリダニが広く分布していることが明らかになった。そしてミヤコカブリダニやケナガカブリダニが下草でのナミハダニやカンザワハダニの密度を抑制しており、樹上でこれらのハダニ類が一時的に増殖してもミヤコカブリダニやケナガカブリダニも増えてこれらのハダニ類の増殖を抑制していると考えられた。